

{ 27 }

ケニア

楽しい娯楽・おそろしい「娯楽」

丹 埜 靖 子

親しみ集う人々

ケニア人は、道で人に会うとよく握手する。久し振りでなくても、もしかして昨日会った人でも、挨拶代わりに手を握る。特に若い人たちは派手で、いろんな新型を開発している。右手を使うことには変わりないが、手を垂直に立てて横から、右と左からバシッとハチ合わせるタイプ、上と下から音を立てて張り合うタイプもある。そして軽く引つ張り合いながら手を離す。あるいは握手したあと、親指と親指をパチンとはじき合うのが最新流行とか。そして、立ち話が始まる。同じ部族の人なら、自分たちの母語で、違う部族の人ならスワヒリ語で、またエリートや国際派の人同士なら英語で、と交わす言葉もいろいろだ。

“美しい大気の中で”、“人と人との交わり”——この二つがケニアでは娯楽の大前提ではない

かと思う。この点で、お金のかからないおしゃべりは、全国的に一番大衆的な楽しみといえうだ。

伝統社会では、「あそび」は生活にくみこまれてゐる。家族やクラン（氏族）という人の輪に囲まれて生まれ育つ日常生活のなかで、非日常的な楽しみといえば成人式や結婚式の際のパティーが一番ではないかと思う。ビールや地酒を飲み、焼き肉を食べ、ダンスと歌に現実を忘れる。何もないうきでも、寄り合いや集いは欠かせない。夜、仕事の後に大人たちが集まつておしゃべりやゲームに花を咲かせれば、子供たちは火を囲んでおじいさんおばあさんのお話やなぞなぞに耳を傾ける。

また、ポピュラーな伝統ゲームで、多少のバリエーションはあるが、全国的に見られるものにバウ（スワヒリ語）バオ（トルカナ、エルゲョ・マラケツト語）あるいはそれぞれの部族語で呼ばれるゲームがある。一〇〜一二個の丸い穴のくぼみを二列作った細長い板と、小石の玉をつかつて遊ぶ。

新しい娯楽は 受容に難点

都会ではお金さえ払えば、映画、芝居、ディスコバー、焼き肉屋、ビアホール、サッカー観戦などいろいろな楽しみはあるが、庶民がそう行けるものでもない。最近ではケニアにも「ゲーセン」ができた。まだ数えるほどで、ケニア在住の外国人やケニア人の金持ちの子供たちが主な客筋のようだが、これが大衆化したとき

の心配として、てんかん症の発作、視力や脳の障害、心理的影響、お金の出所の問題などが取りざたされている。

有名なサファリも、一般の人のためのものではない（ケニアの人がサファリに行かないのは、経済的な理由からだけではないようだ。動物は、植物と同じく自然の一部として、生まれたときから身の回りにあるもので、見て楽しむものではなく、敵か味方へ食糧や毛皮のいずれかに帰するようだ。そのせいか、ケニアでは動物園というものがない。動物孤児院というのが一つあるが、それは観光資源である大切な野生動物のみなしごを、たまたま飼育しているので観光に利用しよう、というくらいのものだ。そういえば、ペットもあまり見かけないように思う。）

国民的英雄の誕生

お金がかからないのはサファリ・ラリー見物で、これは人気がある。毎年四月頃にナイロビ、モンバサ間の入り組んだルートが悪路を使って行われる。ケニア人ライダー、パトリック・ンジルは白人強豪に交じってケニアのために気を吐き、ちよつとした国民的英雄となっている。同様に、ケニア陸上界の長距離選手の世界的活躍は、独立後、ケニアの人びとにほんとうの意味でケニア国民としての誇りを与えた初めての例となったように思う。

伝統文化高揚にも 国家統一と緊張関係

伝統的な娯楽は、地域社会のふれあいを強める働きをしているが、複合社会国家のケニアでは、各部落の文化を高揚しすぎると、当局から警戒される。国の統一に支障をきたすと考えられているからだ。例えば……。

〈ラジオ—母語放送に圧力〉

識字率の低いケニアでは、新聞や本を読むという人は全体としてそれほど多くない。まして輸送事情の悪い地方部では、外界との窓口は、人の口かラジオである。ラジオは教育機関でもあり、娯楽でもある。

国营放送のケニア放送協会がラジオとテレビを独占しているが、一九八〇年代には、小さいながらも、母語による地域放送局がいくつかあったらしい。八二年にユネスコの肝入りで生まれたビクトリア湖のほとりホーム・ベイのコミュニティ放送局もその一つで、毎日夕方の時間帯に放送があり、四〇キロ四方、一〇万人が聞いていたといわれる。地元の人が誰でも番組に参加でき、農業、漁業の話、ウーマンズ・グループの話、衣食住のこと、歌、お知らせなど、何でもあった。身近な人々が生活に関わった話をする、しかも子供の時から馴れ親しんだルオ語で……。

ラジオ放送といえばお上のマウスピースと思っていた人々にとって、これは革命的な出来事

で、初めは信じられない思いだったという。それが二年ばかり続いて、突然とりやめになった理由は分からないが、ある政治家の圧力のためと噂されている。政治家の圧力は他にもあったらしく、結局母語による放送はみな消えてしまった。

〈演劇—国家統一と摩擦〉

ナイロビ大学文学部主任教授だったングギ・ワ・ジョングは若くして創作活動を始め、英文で幾編かのベストセラーを出した後、突然『したい時に結婚するわ』という戯曲をキクユ語で書いた。この頃は、自分の生地カミズリ村に古い建物を利用して発足した教育文化コミュニティセンターで識字活動を行っており、その二十五周年記念として、一九七七年十月、このキクユ語の芝居の上演にこぎつけた。初演から毎日曜、客席は満員で、大成をおさめていた。文字の読めない人々にとっては初めて接した芸術だったといってもよい。しかしこれが一カ月半で上演禁止となり、ングギは逮捕される。

彼は一年間の拘留のあと出獄し、ナイロビ大学の職を剥奪されつつ、この芝居の再上演のために奔走するが、結局許可は下りなかった。県長官のことばによると、「国家統一を脅かす」という理由であった。

公認の覚醒剤、ミラー

一九九二年から民主化が始まったが、ケニアの人々のフラストレーションは依然として大きい。特に若い人の中には、ブハン（ハシー



ミラーを覗んでいる中学生の漫画 (Standard 紙より)

シ)などの覚醒剤が広まっている。大学生、高校生
の三〇〜四〇%は常用者である、と新聞は報じて
いる。また、とうもろこしから醸造する安いチ
ャンガーなどの地酒に浸る人も多い。しかし、こ
れらはいずれも法に触れる。

ブハンより穏かで合法的なミラー(海岸地方で
はカートと呼ばれる)は、ケニア山地直送の覚醒
剤、ミラーの木の若枝を噛む。ミラーの木はアビ
シニアン・ティ、ゴースト・ツリーなどとも呼
ばれ、一五〇〇〜二〇〇〇メートルの高地で、雨
の多い肥沃な土地に育つ、五〜八メートルになる
大木である。この条件にぴったりなのがケニア山
の山腹の地で、メルー県の特産物で世界一の輸出
をまかない、連日五〇〇〇〜六〇〇〇トンが国外
へ運ばれるという。皮を剥いた若枝をかじること
によって、南米のコカの葉のように、中枢神経を

刺激し、頭の疲れを取り去り、眠気を払い、空腹感を癒し、気分をハイにしてくれる。

しかし一九七七年に合法化したケニアを除き、周辺国ではほぼ全面的に栽培および服用が禁止されているため、ケニアのミラーは引っぱりだこで、ソマリア、エチオピア、タンザニア、ジブチなどの周辺国のほかサウジアラビア、イエメン、英国などへ輸出される。国内でも、特にムスリムの男性を中心に五万人の常用者がおり、日に三トンのミラーが消費されていると、ある研究者ははじいている。ムスリムに多いのは、ラマダンの断食期間に、空腹をまぎらすために愛用されているためらしい。

ミラー栽培は難しくない。一本のミラーの木でコーヒーエーカー分よりも大きい収益があるといわれ、メルー農民は競ってこれを栽培する。しかし、問題は流通である。まず第一にミラーは鮮度が大切で、三日以内に消費者の手に届く必要がある。またイギリスやエチオピアへは合法的に輸出できるが、他の国へのルートは「密輸」であり、国境もぐりである。禁止している国では、その理由として、健康上の理由（長期的には歯が溶ける、精神病、心臓病、食道癌、胃潰瘍を誘発する可能性があるなど）、常習者増加による社会問題のほかに、貴重な外貨を食うためである。重症者になると一日一四〇―一五〇本を噛むというから、農業労働者の最低賃金の月額に達してしまう計算になる。もつとも、ミラーの品質にはピンからキリまでであるということだが、隣国ソマリアでは陸軍と空軍機を動員して、国境沿いの乾燥地帯で水際作戦を

展開している。しかしミラーを乗せたセスナ機は首都近辺の砂漠にほとんど痕跡も残さず着地するので、しっぽがつかみにくいという。

リンチに走る人々

最後に、最近とみに流行っている人々のおそろしい行動を紹介しよう。ケニアでもスリや万引きや泥棒は多いが、その犯人や、疑わしいと思われる者は、見つかると人々が放っておかない、追い回す。そして運悪く捕まってしまったら、その人の生命は風前の灯である。寄つてたかつて殴る、蹴る、石をぶつける、半殺しになった頃には誰かが古タイヤを見つけてきて首にかけ、火をつける。ネックレスと呼ばれ、動詞にもなっているほどである。新聞によく出ているこの「モブ・ジャスティス」の光景をみると、まわりでおもしろそうに笑っている人が目につくのである。

識者はこれがごく頻繁に起こっていることを指摘し、ケニアの社会の病める部分であると言っている。また反面、この現象の背景に、草の根からの自助努力の伝統により、さまざまな成果をあげているケニア社会の、力による自助の伝統を指摘する人もいる。

神と人と自然と

——とかくままならぬ浮き世だが、ケニアの人は陰にこもらない。キリスト教徒もムスリムも、そこに神のみこころをみる。何はなくとも熱いケニアティーがあれば、そしてそこにミルクとたつぷりの砂糖が入っていれば、ハクナ マタタ（ノープロブレム）。とはいえ最近はその砂糖が品不足、でも神の与えたもうた試練に耐え、今日も行列に並んでみるのである。

創造主である神は、あるいは空に、あるいは大地に、あるいは山に、あるいは祖先の霊に、木や岩や洞穴に、またとかげやへびに姿をかりて住みたまい、すべてを見通している。ケニアの人は、心の深いところで、つねに、自分を生んでくれた神を意識し、大地と共鳴して生きていくように思える。人は一度生まれて、死ぬのも一度、おそれることはない。大地に帰れば、祖先の霊も待っている。

（たんの やすこ／アジア経済研究所図書資料部主幹）